

継続は才能なり

「継続は力なり」という有名な格言がある。何事も継続することが大事であり、努力を続けていけばやがて物事を成し得るということだろうか。もっとも世の中には、みただけで瞬間的に記憶できる、むずかしい公式などを瞬時に理解できる天才も多い。皮膚科医にもたくさんの天才がいるが、普通は努力をしないと記憶もできないし、論文や雑誌を読んで勉強したり、手術も練習し、経験を積まないと診療能力は向上しないであろう。

さて、物事を継続するというのは一見簡単ようであるが、時間的に、また体力的、精神的にむずかしいことも多い。そのため、どこまで継続し続けられるかで結果の成否が分かれることもある。たとえば、スポーツの世界ではもともと才能に恵まれた一部の人が勝敗を争っているが、それでもどれだけ努力(練習)してきたかで結果に差が生まれるようである。これは、自分がどれだけ努力してきたかが勝負どころでの精神状態に影響を及ぼすからかもしれない。最近では、指導者やメンタルトレーニングの重要性が大きくなっているのは興味深いところである。絶対王者といわれたプレーヤーでもコーチが代わったとたんに勝てなくなることも多い。

少々話がそれてしまったが、私の前任地の群馬大学皮膚科学教室に勤務していたときの話である。皮膚科の臨床も研究も継続していかないと、というどここの仕事場でも出てくる話をしていた。そんなとき、上司の教授の石川 治先生が、「継続は才能なり」とおっしゃった。なるほど、継続できること自体が才能というのは的を射ていると感じた。もう10年以上も前のことだが今でも克明に覚えている名言である。努力をし続けることができるのも一種の才能であろう。実際、私の周りにいる(若い)優秀な皮膚科医は、もともとの才能に加えて継続して努力もしている。まさに努力できるのも才能といったところであろう。

立場が変わった今は、継続は才能なり、しかし自分の努力・気力で継続できるものではないかということの後輩に伝えている。大学には講師、助教、研修医などさまざまなポジションの人がいるので一律には言えないが、まだ専門医を取得していない若手の医師には、仕事が終わってから15分でよいので、成書を毎日読むように指導している。希望的観測かもしれないが、皆、きちんと遂行していると思う(?)。一方で自分もこれまで同様、努力を継続し、さらに新しい領域にチャレンジして皮膚科に貢献しなければならないと思う今日このごろである。

天野 博雄

(岩手医科大学医学部皮膚科学講座教授)